||||紹　介||||

マイケル・ダナム著／山際素男訳『中国はいかにチベットを侵略したか』

澤　喜司郎

（Ⅰ）

本書は，作家であり写真家でもあるマイケル・ダナム氏が7年の歳月をかけ，祖国チベットのために闘った戦士たちに丁寧なインタビューを重ねてまとめたものであり，一人一人の肉声を繋ぎ合わせることによって，これまであまり知られていなかった侵略の実態を浮かび上がらせている。

ダライ・ラマ14世が本書の序文を寄せ，「中共のチベット侵略と占領は今世紀最大の悲劇の一つである。その結果100万人以上のチベット人が殺され，仏教建築物，書籍，芸術品などほとんどが破壊し尽くされた。文化の生きた継承者は母国でその伝統を伝えることができなくなり古いチベット文化は抹殺されてしまった。チベットの過去50年間に起こった出来事に世界は気づき始めているが，武装闘争が展開されたことを知り評価する人はまだ多くない。特に，東チベットのカム地方で，伝統的戦士たちは団結して中共に立ち向かった。このゲリラ部隊は騎馬集団を組み，往々にして時代遅れの武器を手に善戦した。不屈の勇気をもってチベットへの忠誠と愛情を発揮した。最後には中共がチベットを制圧するのを防ぐことはできなかったが，チベット国民が中共のいう『人民解放軍』をどう捉えているか思い知らせたのである。チベット解放闘争は長期的かつ平和的手段によってのみ勝ち得ると信じているが，ひるむことのない勇気と決意をもって闘った自由の戦士を変わることなく尊敬している。著者マイケル・ダナム氏がこの勇者たちの物語を本書で余すところなく私たちに告げていることを大変嬉しく思っている」と述べている。

本書の構成は

第1章　豹の子
第2章　ラウラ，瞋の弩弓
第3章　むりやりな併合
第4章　裏切り
第5章　大虐殺と菩提樹
第6章　ゴンポ・タシとCIA
第7章　空から来たチベット人
第8章　毒を食らうもの
第9章　新たな希望と新たな暴虐
第10章　最後の抵抗

であり，本稿では各章の内容を簡単に紹介したい。

（Ⅱ）

第1章「豹の子」では，チベットの「社会は封建的だし，階級制は存在した。しかし仏教というものは本質的にそうした区別を超えて存在してきた。人間も獅子も蟻んこも生きとし生けるもの一切は貴いのだと主張し，世界にも稀有な，確固とした平和主義に根ざす平等性と深い精神性，個々の信仰の上に成り立つ思想体系である」としたのち，カム族は「豊かなユーモアの持ち主で，自分たちのことをよく笑いものにした。何しろ俺たちは猿から生まれたんだと平気で昔のいい伝えを口にする連中だ」が，「彼らは生来豹の子なのだ。温和しくしていても豹は豹だ。侵すべからざるものを侵されたと感じた瞬間，彼らの顔から微笑みが消える」という。そして「何世紀もの間，中国はチベットにとって迷惑な存在だった。政治的支配者がどう変わろうと，一貫してチベットを植民地化しようとする執念は

変わらなかった。『中華』という帝国意識は常に野蛮なチベットへの優越感を養ってきたのだ」としている。

第2章「ラウラ，瞋の弩弓」では，1949年10月に毛沢東が「チベットを『帝国主義者』から解放するため人民軍をチベットに侵攻させる意図があることを発表した」が，「中共政府のチベットにおける『帝国主義者』云々という言葉はでまかせの口実に過ぎない。だがそういってしまうといささか事態を単純化しすぎることになる。中国人の，漢民族を中心とした中華思想，中国共産党もそれから逃れられないでいる好戦的愛国主義という一種の固定観念を忘れてはいけない。彼らの『祖国』というイメージには大昔の広大な世界，という夢があり，それらを統合し守り抜くのは漢民族たる者の神聖な義務なのである」「チベット人が彼らの祖国から独立した国として振る舞うなど，毛沢東を含む中国人には信じられないことなのだ」「外国の干渉を祖国から排除することは，中国人にとってはどんな時でも正しいことなのだ」という。

そして，1950年3月に「チベット国境で数ヵ月間訓練を積み，満を持していた中共軍はついにカムに侵入を開始し」，同年6月には「中共軍は微笑外交の仮面を剥いだ」が，同年「6月25日，北朝鮮軍が38度線を突破した」ため，「チベット国境沿いに展開されていた中共軍の増強には大きな関心を払わず，次の数年間，世界の目はこちらに釘付けになった」ばかりか，ラサ内閣は「中共軍の侵略についてインドその他の通信機関にもまったく通報していなかったのである。国際社会に警告を発することにより，チベット国内が混乱するのをより恐れたとしか思えない。さらに中共軍が中央チベットに侵入してこない限り東チベットの同胞がどうなろうと構ったことではなかったのだ。しかしそれ以上に政府閣僚の臆病さが問題であった。外国に助けを求めているのが中共軍に知れたら，毛沢東はそれを口実に一気にチベット政府を押し潰しにかかるだろう。理由はともあれ，ラサの貴族階級政府の利己主義が己の運命を決めてしまった」としている。

第3章「むりやりな併合」では，中共軍の侵略によって「内閣と議会の討議は紛糾した。彼らは共産主義者たちと渡り合う気概などまるでなかった」ため，とりあえず国連に緊急アピールを送ったが，「中国と波風を立てまいとして，インドもイギリスもこのチベットの生死がかかったメッセージを無視してしまった」。中国は，1951年5月23日に北京に派遣されたチベットの代表団に「17箇条協定書」を突きつけ，偽の国璽と判を作って否応なく署名させた。同年9月終わりに「17箇条協定書」を承認するかどうかを討議するため議会が召集され，三大僧院長たちが承認に賛成し，10月24日にダライ・ラマ14世は「17箇条協定書」を承認する手紙を毛沢東に送った。著者は，毛沢東の思惑を「ついに既成事実は作られた。これで外国が何をいってこようと，この手紙を振りかざせばいいのだ」と記している。

（Ⅲ）

第4章「裏切り」では，1953年12月末に毛沢東とネール印首相によって結ばれた「パンチシーラ平和五原則協定」は「インドとチベットの交易がチベットを通さずすべて中国経由で行われることを決めている。これは中国にとって，チベット経済統制を意味するだけでなく，政治的に大きな勝利であった。条文の文言は，中国のチベットに対する主権を明確に認めている。その中でチベットは『中国の一地域』としてしか言及されていない。この言葉は極めて重要かつ決定的な意味を含んでいる。これがチベットへの中国の主権を国際的に認めた『最初の例』になるからだ。汎アジア平和の理想で頭がいっぱいのネールは，『この条約締結によってインドはかつてない外交的勝利を収めた』と大見得を切った。また10年前に宗主国イギリスが作った中印国境線を中国に認めさせたと高らかに宣言した」が，インド政府内には「すべての人間は自由と平等であら

ねばならないとする民主主義の時代にあって，中国によるチベット占領は侵略以外の何ものでもない」との批判もあった。

第5章「大虐殺と菩提樹」では，「1956年は，中共の約束事が耳をかす値打ちもない大嘘だったことがはっきりしたという点で，チベット人にとって忘れられない年だった。民主的改革？土地改革？援助？進歩？それらはすべて暴力，脅迫，飢餓，死にいい換えてみればずっと分かり易い。それが中共の共産主義への道だった。チベットを乗っ取り，完全にわが物にするのが中共側の目的だったのだ。これが毛沢東のいう『大家族の一員としてチベットを擁護する』という意味であった」とし，「大勢のチベット人は，手足を切断され，首を切り落とされ，焼かれ，熱湯を浴びせられ，馬や車で引きずり殺されていった」「恐怖政治は止むことなくつづき，漢中共はまったく新しい残酷社会をチベットじゅうに染み渡らせていった。この残虐行為を止める者はおらず，もし地獄がこの世に存在するとしたら，それは正に1956年の東チベットそのものであった」という。そして「チベット人民蜂起の事実は，インド国境を越えて伝わってこなかったのだ。何世紀もチベットを守ってきた『鎖国』は，20世紀になって最も忌まわしい悪夢を招いてしまった」としている。

第6章「ゴンポ・タシとCIA」では，「強制労働所，死刑執行隊，拷問，家族皆殺し，ラマ僧の虐殺—1957年までに，東チベットは中共占領下で恣に蹂躙されていった」が，この頃「アメリカ大統領アイゼンハウアーも，チベット人がアメリカの援助のあるなしにかかわらず抵抗運動を支持していることを認識し，状況の許す限り必要な資金を供給して抵抗勢力を援助することを決心した。彼にしてみればこのまま彼らを見捨てるには忍びなかった」のであろう。他方，後にチベット軍最高の地位である「将軍」の呼称を与えられるゴンポ・タシはダライ・ラマを守るため，ダライ・ラマの承認なしに抵抗勢力をまとめてゆく決心をし，秘密会議を続行し，「チャシ・ガンテック」の行動計画を練り上げていった。著者は「これほど多数の部族長たちが一堂に会したのも初めてなら，一致した行動を取ろうと決意したのもチベット史上かつてないことだった」「中共の侵略によって彼らは初めて同胞意識に目覚めたといっていい。服装もばらばらなら武器らしい武器もなかったけれど，への字に結んだ口元に浮かぶ中共絶滅の固い決意が，同胞である何よりの目印であった」としている。

(Ⅳ)

第7章「空から来たチベット人」では，サイパンと沖縄でCIAから訓練を受けたチベット人6人の若者が祖国に戻って抵抗勢力を拡充したため，中共軍は「泥棒，強姦，殺人などを罪をなすりつけ，『人民日報』はじめ中共マスメディアは世界じゅうに嘘八百を並べ立てた」ばかりか，亡命者グループが3度目になるアピールを国連に送ったことに激怒し，その矛先をダライ・ラマと政府に向けていったという。

第8章「毒を食らうもの」では，中共がダライ・ラマ法王を誘拐し殺害しようとしている噂がラサを駆けめぐると，人々は武装し，自然発生的に人間の壁を作って法王を守ろうとし，著者は「彼らが国民の意思を代表していたのだ。人々はダライ・ラマを拉致させまいとし，逆にチベット政府と支配階層を自分たちの手に握ってしまったのだ。それは民衆の心に共感の波となって広がっていった。この人びとこそが今やチベットの主人公になった」という。そして，ダライ・ラマのラサ脱出計画について，歴史家の中には脱出に実際に手を貸したのはCIAだという者もいるが，それは真実でなく，「あの最も困難な，中共を騙し通すという離れ業をやってのけたのはチベット人自身だ」としている。

第9章「新たな希望と新たな暴虐」では，「チベットへの海外からの関心は最高潮に達した。国際メディアは，チベット国内での目撃者の陳述を掲載し，東西冷

戦諸国を問わずダライ・ラマを『時の人』扱いをした。1959年4月20日には雑誌『タイム』の表紙をダライ・ラマの顔が飾った。あわてたのは中共側である。何もかも後の祭りで『帝国主義者』『反動主義者』と陳腐な文句で罵る以外何もすることができず，揚句に新しい『犯罪者』リストにネール首相を登場させてこき下ろした」という。また同年6月に国際法曹委員会は「チベット問題と法の統治」と題する報告書で「中共がチベット国民，道徳，人種，宗教，それら社会集団を丸ごと抹殺することによって絶滅しようとしたことが，1948年の国連ジェノサイド協定に触れるのは明白である」と述べ，著者は「同報告書が，チベットは歴史的に独立国であり，中国の一部ではないことは明らかであると結論しているのは非常に意義深い」としている。また「1959年秋には中共軍はチベットの大半を制圧したが，カム地方には少数の抵抗勢力が幾つも散在し，神出鬼没のゲリラ活動を続行していた。彼らは山岳地帯に隠れ，主として中共の輸送部隊を襲撃，恐怖の的になっていた。また彼らの活動によって何千というチベット人がインド国境に無事行き着くことができた」という。

第10章「最後の抵抗」では，米国の政策転換によって翻弄されるチベット抵抗運動の戦士たち姿が記され，著者は「最初は中共によって祖国チベットから追い払われ，インドでは入国を拒否され，ニクソンが中共と握手することでアメリカにも見捨てられてしまった。ウバンのユニット22に参加して戦いを求めてきたが，インドにはインドの思惑があり彼らの望むような方向には動かなかった。仲間のカンパ族であったババ・イエシにも裏切られた。そして今，ネパールからも立ち退かされようとしていた」「インド政府はダライ・ラマに圧力をかけ，抵抗勢力に降伏を促すよう求めてきた。もしムスタンで争いが始まったら，ダライ・ラマはインド，ネパール両政府から責められるのは必至であった。ネパールにも数千人の難民がいるのだ。ダライ・ラマはやむなくメッセージをテープに吹き込み，方々の抵抗運動部隊に配布した」。抵抗運動部隊は次々に降伏し，あるいは殺され，チベット抵抗運動は幕を閉じた。

（V）

訳者の山際氏は「訳者あとがき」で，「中共のチベット侵略とその植民地化のやり方は凄まじい。毛沢東が，チベットを支配するにはまず『仏教』と仏教指導層を徹底的に滅ぼせといったのは脅しではなかった」「六千以上あった寺院をことごとく破壊し，焼き払い，文化的遺産―仏像，美術工芸物，書物を抹殺し，仏教僧を血祭りにあげていった。そしてチベット人を二等市民の地位に貶め，言葉を奪い，自分たちの言語を主人の言葉として強制する」「現代チベットにおいて繰り広げられた事実が，大虐殺と文化の抹殺なのだ」「誰も知らない間のどさくさにまぎれ抹殺されてしまったのだ。このような下手人たちが今も健在で中国を支配していることを絶対に忘れてはなるまい」と記している。

以上，本稿では本書の内容を簡単に紹介してきたが，浅学非才な筆者には的確な紹介ができず，また筆者の不勉強による誤読の可能性もあり，この点については著者や訳者のご海容をお願いする次第である。

（講談社インターナショナル，2006年3月，277頁，定価1,800円+税）